

観光における女性の役割分担

— 中国雲南省大理白族を例として —

孫

潔*

Women's Roles in Tourism

— A Case Study on Bai Ethnic Group in Yunnan Dali, China —

Sun Jie

概要

本稿の目的は、中国雲南省大理白（ペー）族自治州S村に居住している白族の女性を事例として取り上げ、観光客向けの絞り藍染めの生産と販売に携わっている白族の女性が、いかに観光の影響に対応していくのかを考察する。また、観光関連の労働に就くことにより、変容した女性の役割分担は、いかなる意義を持っているのかを、現地社会における女性の位置づけを探りながら、明らかにする。

キーワード：ペー族、女性、役割分担

Key Words：Bai Ethnic Group, women, role

1. はじめに

観光現象を分析する上でジェンダーが重要なキーワードとなることが多くの研究成果で既に示されている [石森・安福編 2003 など] (注1)。一般的に、発展途上国においては、観光がホスト側の女性に与えるインパクトの研究は、主に二つの傾向がある。ひとつは、観光が女性に与えたインパクトのプラス面が示されている研究である。観光施設で働くことにより、女性の経済的自立が見られ、女性のエンパワーメントとして注目されること [Cukier-Snow and Wall1993]、或いは観光用伝統工芸品の製作・販売に携わることにより、女性は従来の伝統的役割のほかに新たな選択をもつことが可能になったというような指摘である [Swain1993]。それとは対照的に、女性は家事や育児の負担のほかに、観光関連の賃金労働に従事することにより、二重労働という過剰な労働負担を抱える傾向を指摘する研究もある [安福 1997 : 41]。即ち、観光による女性の経済的自立や社会的地位の向上というプラス面だけではなく、女性が与えられたインパクトのマイナス面も捉えられている。

上述したように、これまでの研究は観光開発に巻き込まれた、ホスト側の「女性」自身が受けたインパクトに重点を置きながら分析を行うものであり、女性はその中で均質であり、一枚岩的な存在であると指摘できる。しかし、観光によって生じる人間関係は、社会的・文化的及び経済的なコンテキストにおいて多様性を持つ。そのため、ジェンダーだけではなく、年齢、人種、階級、教育などによって影響を受けると安福が述べている [安福 2003 : 15]。従って、

*尚綱学院大学 非常勤講師

異なる国や地域の事例研究、或いは女性内部における役割分担の細分化に関する研究は、今もって従来の研究を補完してあまりある有効性を持ち合わせている。本稿もまたその一つだと筆者は考える。

女性開発理論の中では、世帯内の性別役割分業（gender divisions of labor）、或いは性別を理由とする社会の分業ならびに家庭内の役割分担について、第三世界の貧困層の女性（注2）は三重の役割（triple role）、即ち「生産労働」、「再生産労働」、「コミュニティ活動」を負っていることが認められている。「女性の仕事」には、「再生産」労働、つまり労働力を維持し、再生するために子供を産み、育てる責任を担うだけでなく、たとえ補助的な収入であれば、「生産労働」も含まれる。さらにまた、女性は農村においても都市においてもコミュニティで必要な共同消費物を準備したりする「コミュニティ活動」にも従事している [Caroline1996: 50]。

本稿では、中国雲南省大理白（ペー）族自治州S村（以下「S村」と略す）に居住している白族の女性を事例として取り上げる。観光客向けの藍絞り染めの生産と販売など、新たな賃金労働に従事している女性に焦点を当てて、「生産労働」、「再生産労働」、「コミュニティ活動」の三つの側面から、S村の女性の役割分担を考察する。ただし、「生産労働」と「再生産労働」に関しては、前述した定義に基づいて検討するが、「コミュニティ活動」に関しては、当地域において重要な土着信仰という側面から、白族の女性の役割を明らかにする。資料としては、部分的には1980年代後半から相次いで出版されている研究報告に依拠しているが、とりわけ雲南省大理ペー族自治州で2001年—2004年に断続的に行った現地調査に拠ることとする。

2. 調査地であるS村の概況

1984年春、中国雲南省北西部に位置している大理盆地が外国人観光客に開放されて以来、大理白族自治州（以下「大理州」と略す）を訪れる観光者の数は年ごとに増えてきた。特に、1999年の「世界花の博覧会」が雲南省の昆明で行われたことを契機として、大理を訪ねる観光者が急速に増加してきた。例えば、大理州を訪れた観光者の数は1997年に374万人だったのに対し、2000年に2196.6万人まで一躍した [『雲南統計年鑑』2001]。大理州の観光資源といえば、大理の旧県城である「古城」、南詔時代に創建され「三塔」で有名な崇聖寺、明代の旅行家徐霞客（1586—1641）が謳った「胡蝶泉」などである。1990年代に入り、これらの観光スポットは遊覧船で周る洱海（淡水湖名）遊覧とともに、日帰り観光コースに組み入れられてきた。

徐霞客は「泉上大树，当四月即发花如蝶，须翅翩然，与生蝶无异。又有真蝶千万，连须钩足，自树颠倒悬而下，及于泉面，缤纷络绎，五彩焕然」（泉の上に樹木があり、四月になると、咲いている花は生きている蝶のようである。そのほかに、生きている千万の蝶々は触角と足を互いに繋がり、樹木から逆さまに泉の水面まで垂れ下がっている）との賛美の詩で数え切れない蝶々の飛び交う絶景を詠んだ [徐弘祖1995: 622]。今日では日々千万の蝶の姿はもう見られないが、「胡蝶泉」の魅力が以前どおり存在している。大理州の観光ツアーにおいて、「胡蝶泉」は欠かせない観光地であり、また「胡蝶泉」の南側にあるS村がこの日帰りツアーの中継点となっている。S村を訪れてきた最も多い観光客は、遊覧船で洱海を一周してから、毎日午前11時前後に、S村の港に下船した団体ツアー客である。彼らがS村で行う観光活動は、観光ツアーとともに既にパターン化されている。つまり、まず「胡蝶泉」を見物し、昼ごはんを

済ませ、それから絞り藍染めなどのお土産を購入することである。殆どの観光客はS村で毎日4時間ほど滞在する。限られた時間帯のみに観光客を接待することも、後述する家庭内の役割分担と密接な関係を持っている。

S村は総人口が9500人、2183世帯で（2003年）、雲南省で最大の白族村である。行政的には大理白族自治州喜洲鎮に属し、大理の中心街と麗江地区を南北に結びつける重要な商売集散地であり、昔から軍事要衝でもあった。S村の各世帯は主に核家族（nuclear family）あるいは基幹家族（stem family）から構成されていて、普通の婚姻は夫方居住の形態をとっている。地理的にS村は山（蒼山）と湖（洱海）に囲まれ、村の面積を拡大できなかったことが原因で、昔から人口が多いのに、土地が少ないという特徴があった。2003年のデータによると、一人当たりの耕地面積は0.32ムー（注3）である。生計は農業だけに頼れないので、昔から農業、手工業、漁業、商業などを併用していた。清代末期に編纂された『大理県志稿』第62巻の記載には、「周城隈洞傍、皆男耕女織」（周城では皆男が畑仕事をし、女が機織をしていた）[『白族社会歴史調査（三）』1991：213]とある。この記述によれば、S村の女性は清代から機織作業に携わっていると伺える。

1984年以後に導入した観光開発政策により、S村の産業構造は大きく変化した。農業の占める比率とその収入は次第に減少しつつあり、藍絞りに染産業、建築業、食品加工業などの第二次産業と、交通業、商業、観光業に関する第三次産業の著しい増加は注目に値する。例えば、筆者の調査データによると、2002年には、S村全体の収入が23698万元であった。そのうち、第一次産業である農業はたった4%を占めるに過ぎず、第二、第三次産業がそれぞれ43.2%、52.8%を占めていた。つまり、第二次産業と第三次産業が第一次産業であった農業に次第に取って代わり、S村の経済基盤を支えるようになった。これらの産業の発展は1980年代以後に行われた観光開発、特に絞り藍染め産業の振興と緊密に繋がっていると考えられる。

S村は古来から伝統的な、白族代表的な染物—絞り藍染めの生産地である。藍絞りに染というのは、器用な手先から生まれ出る清楚な絞りの花で、藍の色が濃ければ濃いほど絞りは白く際立つ美しい染物である。横山氏の研究によると、1980年代半ばには、S村の人々のみならず、大半の中国人は絞り藍染めの布の服を好むことはなかったが、外国人観光客の中には絞り藍染めの素朴な味わいや木綿の肌触りを好む者が多かった。その後、外国人の観光客が絞り藍染めの布で服を仕立ったり、また日本会社との取引が増大することにより、1997年頃になると、絞り藍染め関連のみやげ物は最も観光客の目を引き、大理の代表的な観光商品となった[横山2004：192]。筆者の調査データによると、村の北側から胡蝶泉に至るまでの道の両側にみやげ物店が148店舗あり、絞り藍染め品を販売する店舗は65%（96店舗）を占めている（2003年）。S村の絞り染め工場を始めとする技術発展のお陰で、また観光開発とともに、藍染以外に草木染、樹木皮染め、草木染と藍染両方とも使う新しい手法を開発した。デザインも伝統的な「蝶々」、「梅花」など素朴な図案から1000余りまで増加し、色も単独な藍から藍、赤、緑、褐色、黄色など多彩になってきた[金2001]。つまり、外国の消費者や現地を訪れる観光者の好みに合わせ、積極的に新しい技法やデザインの開発に取り組むようになった。こうした「土布」と称される「土産品」の生産と販売は、白族の土着性が強調されており、「土」のカテゴリーの復権をもたらしつつあると横山が指摘している[横山1997：181-182]。観光の発展にもなってS村で生じたこの新しい産業の展開により、その重要な担い手である白族の女性に様々な影響を与えている。

3. 観光における女性の役割分担

3.1 生産労働における女性の役割

生産の役割とは、現金やそれに相当するものを得るために男女双方によってなされる仕事のことである [Caroline1996: 55]。一般的に、観光産業により女性の雇用機会が増加する事例は多くの地域で見受けられる [中谷 2000 など]。S村の女性にとって、観光産業によって職業の選択肢は以下のように広がった。例えば、レストランや宿屋に勤めたり、お土産を販売したり、観光客を案内したり、さらに自営業でレストランや土産品の売店を経営することなどである。そのうち、一番注目を浴びているのは絞り藍染めの手作業を請け負うことである。S村の絞り藍染産業の中心は周城の藍染国営工場である。工場の生産は集中、分散と再集中の形で行われている。素材の購入、デザインの考案、印刷、染色などは工場が担当し、各農家は布の絞りと糸解きなどの手作業を請け負う。この作業はS村の女性の80%以上が参加しており、女性にとって一番重要な収入源でもある。糸絞りの手作業は年齢を問わず、S村でほとんどの女性ができ、女の子に勉強させる技術である。また、この手作業は白族の周城人の伝統的な手工芸であり、技術の上達さ、テクニックの繊細さによって、当地社会で女性の地位や価値を評価する一つの基準でもある。

調査によると、各家庭で一人のみの女性が絞り糸解き二つの請負手作業をするとして、品物により、作業時間と報酬で単純に計算すれば、少なくとも一年間に1000円以上の収入を得られる見込みがある。この金額はS村における一人当たりの年収入である3841円の30%ぐらいを占めた(2003年)。以下の表1はS村のいくつかの藍絞り染品を例として、絞り糸解き二つ手作業の賃金を列挙しよう。

表1 S村藍染品の手作業費用

品名	サイズ	生地	図案	仕上がりまでの日にち	絞り	染め	糸解きと縫い合わせ
シート	2m×1.5m	棉	四角の花	7日	5-25元 図案により	5元/m	0.6元/m
テーブルクロス	1.8m×1.2m	棉	紫陽花刺繍	8日	8元	8元/m 草木染	12-14元
暖簾	1.5m×0.9m	麻	蝶々と花	12日	65元 (暖簾ごとのコスト)		
ハンカチ	0.4m×0.4m	棉	板藍根の花	3日	7.5元 (ハンカチごとのコスト)		

(データの出所: 2002年5月、筆者の調査により)

S村では大部分の女性にとって、絞り藍染の生産と商売は農業以外の収入を増加させる副業であり、絞り藍染からの収入だけに完全に頼ることはない。しかし、この絞り藍染めの商売で大いに成功を取った女性にとっては、生活の中心は完全に商売の舞台に移ったと言えるだろう。例えば、S村において、新しい商売ネットワーク——連戸経営、即ちいくつかの世帯が連携し、

共同経営、利益均分の経済共同体が創出されてきた。白族の言葉で言えば“^{ダーバン}搭伴”で、パートナーを作るという意味である。この連戸経営では主体は殆ど女性であり、彼女たちが自ら生産を組織しており、また直接観光客に販売を行っている。連戸する世帯は世帯の数に拘らず、随意に連携している。本人に連携の理由を聞けば、「一人では手応えがない」、「一世帯だけするとつまらない」などと答えてくれた。しかし、以上の理由よりむしろ利益とリスクを共同に分担する最善の商売方法と推測できる。なぜならば、昼間の11時から14時までという限られた時間帯に殺到してきた観光客に対応するために、出来る限り売れ行きをよくさせる商売のテクニックであるからとも言える。S村においては、最も有名な連戸経営は「八人の姉妹」と「四人の姉妹」である。以下は「四人の姉妹」を例として取り上げて検討してみよう。

事例：四人の姉妹

「四人の姉妹」はS村で始めて連携し、旅行社との長期的な契約を通し、専ら団体の観光客を相手にする四人の女性の連戸経営である。四人の中で一番年配の人は42歳で、一番若い人は30歳である（2003年）。四人とも2—3人の子供を持っている母親である。連携は1996年に始まり、親族と友人関係を基本に結んできた。分析の便宜を図るため、年齢の長幼に従い、一番年配の方をA氏と仮名を付け、それ以外の方を順次B氏、C氏、D氏とする。A氏とC氏は姉妹で、D氏と再従姉妹関係である。B氏はC氏の友達である。以下は親戚関係であるA、C、D姉妹三人の系図である。

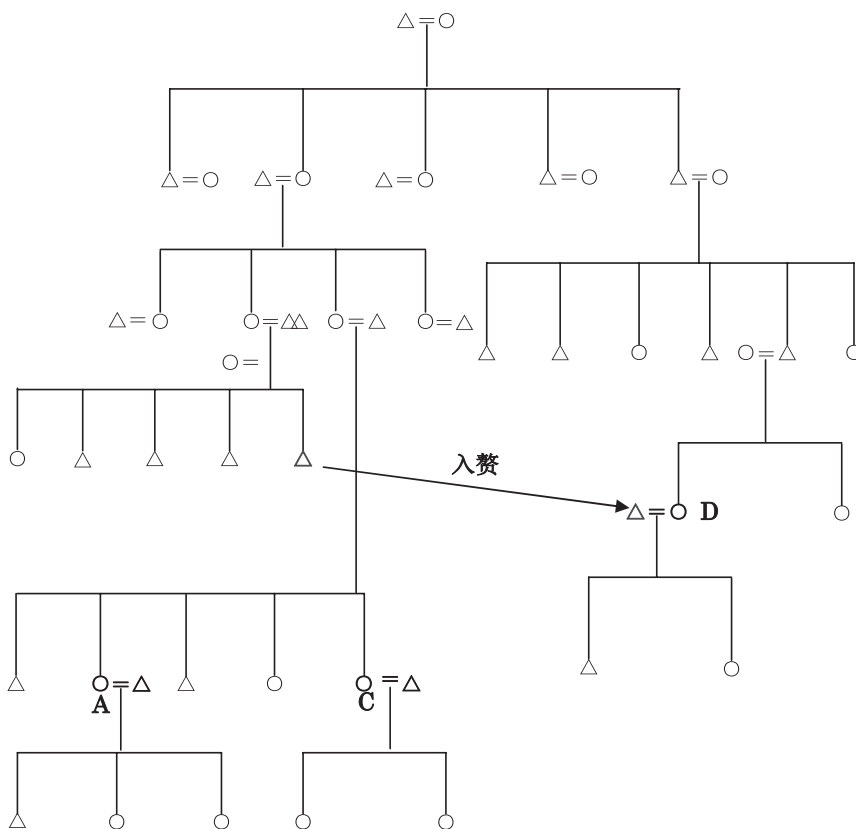


図1 A、C、D姉妹三人の系図

商売の場所はD氏の家で行われている。入り口には観光客を招くために中国語と英語の看板を掲げている。中庭には染料の藍草を少し栽培しており、また布を染める藍樽と干し棚が置いてある。販売形式としては、旅行社と長期的な契約をし、観光ツアー客を自宅でもてなしながら、絞り藍染め土産品を販売している。観光客が部屋に入ったら、まずは一階で藍絞り染の生地、染料、手法、染色のプロセスなどを説明する。それから、二階に案内し、藍絞り染の現品と民族衣装を紹介しながら商売する。顧客は国外からの観光客が一番多いので、日本人向けの暖簾、座布団、風呂敷や、西洋人向けの手作り刺繍などを販売している。商売のために、簡単な日本語、英語、タイ語が話せる。主に小売をしているが、時には業者を通し、国内外の卸売りもある。商売の決算は随時行なわれ、利益は四人で均分することになる。彼女たちの紹介によると、もともとの商品は自分で生産且つ販売していたが、観光客の増加とともに、糸絞りの手作業は家族、親戚、ひいては隣居や友人などの他人にまで請負に出すことになった。特に1999年に「世界花の博覧会」が昆明で行われたため、「四人の姉妹」は商売のピークを迎え、多い場合は村の200世帯に請負を出すことがあったという。そのお陰で、1999年の一年間だけで一人当たり8万円ほどの大金（注4）を儲けたと自称した。従って、筆者の調査した2003年までの7年間で、絞り藍染めの生産と販売を通し、四人は大金を儲け、オートバイ、携帯電話など最新の家電製品を購入し、さらに家を新築した。

一方、彼女たちの夫はそれぞれ以下の仕事に携わっている。A氏の夫は数年前に村を離れ出稼ぎに行った。B氏の夫は大理の県城で公務員である。C氏の夫は村の幼稚園の臨時教員である。D氏の夫は村で建築の仕事をしている。夫婦はそれぞれ別の労働スケジュールで暮らしており、夫たちは四人姉妹の連戸経営に全く関与していない。四人姉妹の夫たちの月収入は大体600元—1200元ぐらいであり、彼女たちの観光による収入と比べると、圧倒的に少ないのが現実である。従って、彼女たちの事例を通じて、観光に関わる絞り藍染めの生産、販売は確実に女性の経済力の向上と結びついており、観光による収入の増加は家庭内での地位の向上、女性のエンパワーメントと結びついていると一見している。

しかし、筆者が四人の姉妹を含むS村に居住している白族の男女を問わずにインタビューを行い、「お宅で誰の収入が多いですか、誰の意見に従いますか」と聞いたら、殆どの女性が「不一定（定まらない）」と答えてくれた。その理由として、一時的に観光業から多くの収入がもたらされているが、観光シーズン、観光者人数の多さにより左右されているので、観光関連の収入は村の人々にとって、完全に依存できるものではないと教えてくれた。また、自分の収入より女性のほうが多いと認めた男性は居ても、彼らが常に経済の向上は家庭内部の主導権と導かないと主張している。一方、それと対照的に、女性も往々にしてその意見を認め、自発的に「男性優位」との文化を維持していることが窺える。つまり、女性の経済地位の向上は必ずしも女性のエンパワーメントとただちに結びつくわけではないと思われる。

楊国才氏の研究によると、日々の生活場面においては白族の女性は昔から家庭内部の権利を握り、日常生活と財政を管理していると指摘している〔楊2001：338〕。また筆者の聞き取り調査によると、観光業が導入された前に、市場で野菜を売ったり、小売店を開いたりをして、副収入を稼いだ女性は少なくなかったという。現地の人々にとって、今の観光関連の仕事に就くこと、及び観光による収入の増加は単に従来の労働の内容を変えているだけであり、その労働により収入が大幅に増加したと理解されているだろう。

3.2 再生産労働における女性の役割

再生産の役割とは、出産や子育ての責任、及び労働力の再生産とその維持のため女性によって行われる家庭内の仕事である。生物学的な再生産（出産）の仕事だけではなく、労働力となっている人々（夫や働いている子供たち）や、将来、労働力となる人々（幼児や児童）の世話や面倒も含まれる [Caroline1996:52]。S村では古来、人口過剰のため、男性は収入を求めて出稼ぎに行くようになった。筆者が調査を行った2002年前後、周城の男性の多くが道路の舗装や、建築業に従事したりしているため、家庭内は以前のように、重要な働き手がないという厳しい状況であった。男性が不在なので男の力をあてにすることができず、畑仕事をはじめとして、家計を助ける副業や、また家庭内の家事や子供の世話もほとんど女性が担うように、家庭内部における男女役割分担には調査時点では際立った変化はまだ見いだせなかった。つまり、家庭の事は女性の仕事であるという伝統的な考え方はあまりに変わらない。

観光客がほとんど昼間の11時から14時まで、3—4時間だけS村に滞在するので、商売をしている女性はそれ以外の時間に、農業や藍絞りに染の手作業や家事など、家庭内の家事労働も以前どおりに要求されている。特に、糸絞りの手作業は時間さえあれば、別にやるのがなければ、いつもやっている。言わば「人閑手不閑」（体が働かなくても、手が働いている）。即ち、女性が担当する請負の手作業は作業の時間、場所や、作業人の年齢などに拘らない仕事なので、観光関連の労働と家庭内の家事や育児、また農繁期の農作業までも両立できると考えられる。前節で紹介した「四人の姉妹」も、観光客をもてなす以外に、糸絞りの手作業、家事や畑仕事をしている。ただし、一旦絞りの手作業の仕事が増えた場合、あるいは藍染品の供給がニーズに満たせない場合、多くの現金収入を得るために、体力と時間を惜みず、絞り藍染の生産と商売を生活の中心にすることになる。これらの場合には、中国の男女平等の政策が実施されているお蔭か、観光業から収入を多くもらえるからか、家で女性に協力している男性も増えている。しかし、男性は生物学的な再生産（子供を産むこと）以外に、家庭の家事、子供と老人の世話をあまり負担していない。したがって、男性のやらない「女の仕事」は大体年配の女性が若い女性の代わりに担当している。

本稿では、S村の女性を若い女性と年配女性の二つに分けている。ここで年配の女性は基幹家族で結婚している子供を持つ姑か母である女性を指し、若い女性は成年で未婚か未婚の子供を持つ女性を指している。農家の女性は普通、20歳前後で結婚するので、息子の嫁を迎え、姑になってもまだ半分の働き手として使われている。年配女性、若い女性という言い方するのは、単に説明するために、便宜上二つに分けただけであり、絶対的な年齢を意味するわけではない。年配の女性と若い女性の関係と言えば、世代的には二代で、母と娘か、或いは姑と嫁の関係である。糸絞りの手作業は年配の女性と若い女性の両方がやっているが、商売をする女性は圧倒的に若い女性のほうが多い。若い女性は観光業から高収入をもらえるので、畑仕事をあまり好まない。農家は自分で野菜を栽培したり、豚、鶏などを飼ったりし、日常生活に必要な食材をできるだけ買わないで、冠婚葬祭、贈答返礼や新築建設などの出費に備えて日々貯金している。つまり、勤勉に働き、無駄遣いを儉約することは一般的な白族家庭の家政方針である。したがって、若い女性が観光関連の仕事に従事するため、以上の仕事は年配の女性に課されることになる。例えば、昼間の商売時間には、孫たちの世話は母親の代わりに祖母が殆ど見ていると筆者は観察した。

家庭内における二世代の女性の役割分担について、次のような共通点がまとめられる。年配

の女性と若い女性は、観光用伝統工芸品である絞り藍染めの生産に携わっている。糸絞りや糸解くなどの手作業は、やはり「女の仕事」として位置づけられ、従来のジェンダー規範に逸れないと指摘できる。一方、二世代における女性の役割分担の相違点としては、年配の女性は手作業をしたり、家事や子供の世話を協力するなど、やはり家庭内の労働に限定されていて、家の内部に閉じこめられていると思われる。ただし、若い女性は絞り藍染めの生産だけではなく、直接観光者に販売することを通して、「家」と「社会」、二つの領域に出入りしているとも言えよう。

また、年齢における女性の役割分担の相違点を追求すれば、以下の3点の原因が要約できる。一つは、年配の女性は大体50歳以上で、学校に通った人が少ないし、漢話（訛りのある標準中国語）を話せない、字も読めない人が多い。それに対して、若い女性は少なくとも小学校に二、三年間は通ったことがあり、観光客に対応する程度の漢話が大体できる。二つは、若い女性は年齢的に若くて、記憶力もよく、商売のための英語、日本語も簡単に話せるようになる。そのため、若い女性は年配女性より知的能力と体力においてより適性があり、観光業の参与による高い現金収入を得られる。三つは、若い女性は観光客をもてなすために、既婚者の身分でありながら、常に本来は白族未婚者が身につけるべき鮮やかな衣装に身を包み、未婚者の髪型をしている。しかし、年配の女性は既に結婚している子供を持ち、孫もいるので、地味な既婚者衣装と髪型をしている。鮮やかな民族衣装をしている女性は写真モデルとして観光者に撮影されやすいこともあり、年配女性より商品の売れ行きが良くなりやすいと思われる。

先述したとおり、年齢、知識、容姿（衣装）に基づいて、大部分の女性が従事できる観光業（手作業の請負仕事）と、一部分の女性しか従事できない仕事（接客）と、女性内部における格差が生じてきたと言えよう。このような異なる役割分担は、当該地域の女性たちが観光による新しい社会変化に対し、積極的に取り扱っている柔軟な対応策であると考えられる。また、1978年以後に導入された生産請負制の実施により、核家族や基幹家族の家庭は再び社会経済単位として機能している。一単位としての最大な経済価値を創出するために、個人なりの能力を発揮させる合理的な仕事分担となったためであると思われる。

3.3 コミュニティ活動における女性の役割

コミュニティ・レベルの仕事においては、主に女性が「空いている時間」によってなされる「コミュニティ管理」と、主に男性によってなされる「コミュニティ政治活動」と二つの側面が含まれている。コミュニティ管理の役割のなかには、再生産の役割の延長として女性が主に行うコミュニティ・レベルの活動がある。例えば、水や健康管理、教育など共同で消費する貴重な資源が確実に供給され維持できるようにすることである。それは、「余暇」に行われる自発的で無報酬の仕事である。これに対して、コミュニティ政策の役割とは、コミュニティ・レベルにおいて正式の政治組織を作る男たちが行う活動からなる。これには給料のような形で直接的に払われる報酬なり、地位や権威のように間接的に報われる報酬なり、どちらにしろ、大抵はなんらかの報酬がある [Caroline1996: 58-62]。

以上のCarolineの説明にある水の分配や教育活動などは、S村では行政政府が管理している。中国社会では村廟とコミュニティの生活と緊密に関連している。S村におけるコミュニティ活動としては、近隣やコミュニティの人々を含めた共通のニーズがあり、相互の助け合いという理念から考えると、土着信仰があげられる。特に、女性自身もこれらの活動への参加も「女性

の欠かせない仕事」であるとされている。本節ではローカル・コミュニティにおいて、土着信仰に関わる活動に携わっている女性の役割を検討してみよう。

歴史的に白族は雲南省の少数民族で漢文化の影響を強く受けた民族であり、漢文化が雲南省に伝わってきたのは漢代（前202 - 220）に遡ることができ、長い歴史を持っているとされている。特に、明代（1368-1644）に大量の漢族が大理盆地に流入してきたため、漢文化との融合が急速に進んだ。現在「漢文化の中心地」と言われる中原地方でもう失われた漢文化がまだ白族にそのまま残されているところも多くあり、人類学者許煥光氏に「漢人よりもっと漢人らしい」[許2001:49]と呼ばれた少数民族である。冠婚葬祭に父系親族関係が重視されている一方で、白族の土着宗教——「本主」信仰は周城人の生活の様々な側面に深い影響を与えている。「本主」は白族の村を守る神様であり、白族アイデンティティの一つの表われである。平日の病気払い、豊作祈りから陰暦2月の「本主迎え」、6月の「松明祭り」、7月の「お盆」などの祭りまで、「本主」をめぐり、様々な儀礼が行われている。信仰する神様の特徴は、孔子、釈迦、玉皇大帝、閼帝、趙木郎、杜朝選など男性の神様が多く、女性の神様は子孫娘娘、大娘娘、二娘娘、観音老母しかないことである。男性の神様は勇敢、正義、庶民を救うシンボルである一方で、女性の神様は女の生物的な特徴を強調し、現実社会における妻、母親の身分であり、男性に救われ、男性に従属する立場に位置づけられている。また、男女同行で「本主」の廟に参拝に行く場合は、必ず男性は先立ち、女性は男性に追行する。血は不浄だと思われるため、女性は生理中、妊娠中に「本主」の廟に入り込むことができないということである。この文化背景により現地の女性自身もこの時点で自分を不浄だと認めている。すなわち、現実社会における性別による役割分業観念は庶民の土着信仰の精神世界、及びそれに関連する活動に一致していることが垣間見える。

S村の信仰組織は三つあり、参加者が年配の男性である洞経会、参加者が主に年配の女性である方広蓮池会、さらに方広蓮池会が南北の二つに分けられている。

表2：S村信仰組織一覧

組織名	崇拜	活動場所	参加者	人数（2000年）
洞経会	孔子、釈迦、玉皇大帝、閼帝、趙木郎、杜朝選	龍泉寺	年配男性	146名（男性）
南の方広蓮池会	趙木郎、子孫娘娘、観音老母	景帝廟（南本主廟）	主に年配女性	650余人 男性12人 女性618人
北の方広蓮池会	杜朝選、大娘娘、二娘娘、観音老母	霊帝廟（北本主廟）	主に年配女性	730余人 女720人以上

（男女人数の構成データの出所：《周城文化》2001年、中央民族大学出版社より）

表2で示されたように、S村においては、女性の参加者の人数が多いが、三つの組織の会長が全部男性であることは注目に値する。特に方広蓮池会の男性参加者は著しく少ない。また、会長を除き、これらの男性参加者は方広蓮池会において、殆ど楽器の演奏者、文書代行者、財政の管理者などである。その理由として「字が読めない女性の代わりにやってあげなければならない」（注5）と教えてくれた。宗教組織の内部において、男性は女性の持たない知識と能

力を持ち、宗教組織の中核をなしていることに対し、女性は文化的、精神的に以前どおり、男性より低い立場であると思われる。一方、これまで男性しか入会しなかった洞経会に女性の姿が現れてきた。それは近年、様々なイベントにおいて、これまで楽器を演奏した者は男性のみだったのに対し、少人数の女性演奏者の参入により舞台効果を発揮できるからという。すなわち、方広蓮池会における男性の存在と違い、洞経会への女性の参入は男性ができない仕事に携わるのではなく、ただ飾りのような役割を担っているだけであると伺える。コミュニティ活動において多くの女性が活躍しているにもかかわらず、女性はやはり従来のジェンダー関係の規範内で活躍していると思われる。信仰組織内部でリーダーシップを握っているのは男性であり、給料を得られないけど、地位や権威のような間接的な報酬をもって報われており、女性より優位に立っている。

ここで特筆したいことは、「本主」と関連する土着信仰の敬虔な教徒が殆ど年配の女性であるという点である。聞き取り調査によると、S村の女性は、大体50歳前後に方広蓮池会に入会する。彼女たちは自分を含めた家族全員の健康、平安、及び商売の繁盛を祈るために、土着の神様「本主」に線香をたむけ、神様の加護を求める。また、前節で言及した四人の姉妹は、商売優先であると認識し、家事、育児、祭祀の参加などは、観光商売よりも一段低い位置に置いている。筆者は調査中、「本主」を拝む祭りに数回参加した。しかし、四人の姉妹が全員で参加した祭りは一回もなかった。旅行社と契約を結んだので、いつでも観光客をもてなす準備をしなければならないという。その代わりに、自分の母親か姑が代行する傾向にある。彼女たちの解釈では、観光客向けの商売でも、祭りへ参加し神様からの加護を願う祈祷でも、いずれも家を繁盛させるために、或いは家族全員の平安を守るために行う仕事であり、「女の仕事」であるということである。従って、女性内部における異なる役割分担は、観光商売を優先させ、それ以外の活動は商売に合わせて柔軟に対応している対策であると思われる。

4. おわりに

以上のように、観光開発に伴い、白族の伝統的な「土布」——絞り藍染めは飛躍的に発展した。S村の女性は観光業の参与、特に絞り藍染めの生産、販売を通じて、女性の収入が大幅に増加してきた。特に、観光客向けの商売活動の中で、新しい商売ネットワーク——連戸経営の現れは注目に値する。連戸経営を通じて、女性は受身である国営工場の手作業の請け負い側から、積極的な商品の生産者・販売者に変身してきた。従って、女性の役割が従来の家庭内部中心のみではなく、徐々に家庭外の社会へ進出し、さらに「四人の姉妹」のように、生活の中心が完全に商売の舞台に移った女性たちも現れる。彼女たちは、自分で生産且つ販売のみに限らず、観光客の増加を伴い、糸絞りの手作業は家族、親戚、ひいては隣居や友人などの他人にまで請負に出すことになった。ここで指摘したいことは、連戸経営はいくつかの世帯が連携しており、経済優先な共同体であるが、連携の相手の選択から手作業の請負に至るまで、やはり親族関係を中心に展開しているという点である。それが利益とリスク両方を考慮すると同時に、経済的な協働も相互の愛情を強化するための役に立っていると考えられる。

ところが、絞り藍染めの生産と販売を通じて、経済的な向上は白族女性のエンパワーメントとそれほど緊密に結び付けられていないと思われる。確かに、観光関連の労働に従事することを通じて、女性の経済的能力を向上させている。しかし、S村の人々にとって、一つの生活共

同集団として、女性の絞り藍染めの手作業に携わることは、男性の出稼ぎ労働と、年配女性の家事や土着信仰活動と同じく、ただ家庭内における分業の一形態と位置づけられている。また、女性は家庭内における「再生産労働」や、またコミュニティ活動における女性の役割において、やはりこれまでのジェンダー規範から著しく逸脱してはいない。1980年以來に行われてきた観光業の発展とともに、観光客向けの絞り藍染めの生産と販売に携わっていることは、白族の女性にとってただ職業の選択肢が増えており、収入が増加してきたと理解されているだろうと思われる。

特に、絞り藍染めの請負作業は、年齢、時間、場所に拘らないので、従来の「女の仕事」というカテゴリーに帰属させている。また、この仕事は家事、育児や土着信仰活動など「義務」といった従来の女性役割を大きく損なうものではない。ただし、観光客の観光時間に合わせ、自分の仕事分担や時間の配置などは実際の状況に応じて柔軟な対策を取っていると言えよう。また同一社会でも、女性というカテゴリーは均質なものではなく、年齢、教育によって、彼女たちの役割も違っていることが明らかになった。すなわち、家庭内において、観光仕事に従事できる女性とできない女性の間に新しい格差が生じたと同えた。さらに、村の内部では、四人姉妹のような観光商売を通じて大儲けした女性と、そうではない女性の間にも新しい格差が生じていると推測できる。

いずれの社会のジェンダーシステムも突如現われたものではない。実際にはそれは長期的に社会化する（genderization）ものなのである。これは一般的なセックス（man/woman）という生物的な性機能の違いに対し、社会、文化的に作られた性差であり、また当地の歴史、宗教、環境などと切っても切れない関わりを持っているのである。観光業の発展により、白族女性の経済的な地位は確かに向上しており、生産労働や再生産労働の面において、様々な変化が見えてきた。しかし、白族文化の固有性と相関の結果として、表面的には際立った変化が見えていたが、土着信仰のおよび儀礼的なこととの関係が近ければ近いほど、「男性中心」の傾向が強くなっている。即ち、観光による増加した女性の収入は、従来のジェンダー関係を根本的に揺るぎ動かすエネルギーではないと思われる。

注

1. 観光とジェンダーをめぐる先行研究は主に以下の4点でまとめられる。①観光のマーケティングにおける女性性、②観光における女性労働、③観光による女性のエンパワーメント、④地域社会におけるジェンダー関係 [安福2003: 7-21]。
2. 本研究の対象地であるS村は第三世界に属している。S村の女性は中国国内で貧困層とは言えないものの、彼女たちはやはり三重の役割を果たしていると筆者は考える。
3. 1ムーは6667アールに当たる。
4. 8万元という金額は、当村一人当たりの平均年収の20倍ほどある。
5. 彼女たちは殆ど教育を受けなかったため、漢字が読めないし、漢語も話せない現実である。筆者が50歳以上の女性に50人アンケート調査を行った。漢語の読み書きができる女性は一人も居なかった。また、漢語が話せる女性は5人に過ぎなかった。

参 考 文 献

- 石森秀三・安福恵美子編
2003『国立民族学博物館調査報告 37：観光とジェンダー』
Caroline O.N.Moser
1996 Gender Planning and Development 久保田賢一、久保田真弓訳『ジェンダー・開発・NGO』,新評論
Cukier-Snow,J. and G.Wall
1993 Tourism Employment: Perspectives from Bali.Tourism Management 14 (3) :195-201
金少萍
2001《白族扎染——从**传统**到**现代**》, 云南人民出版社
郝翔、朱炳祥等
2001《周城文化》中央民族大学出版社
中谷文美
2000「『女の手仕事』としての布生産——インドネシア、バリ島における手織物業をめぐって」『民族学研究』
65/3、p 233-251
Swain, M. B.
1993 Women Producers of Ethnic Arts. *Annals of Tourism Research* 20:32-51
- 许焯光**
2001《祖**荫**下》, 王凡, 徐隆德译, 南天**书**局有限公司出版。
徐弘祖
1995《徐霞客游记》, 唐云校著, 成都出版社
- 安福恵美子
2003「観光とジェンダーをめぐる諸問題」石森秀三・安福恵美子編『国立民族学博物館調査報告 37：観光とジェンダー』、p7-21
- 楊国才
2001「白族婦女生育和教育觀念的変遷」横山廣子編『国立民族学博物館調査報告 20：中国における民族文化の動態と国家をめぐる人類学的研究』、p331-352
横山廣子
2004「観光を中心とする経済発展と文化——雲南省大理盆地の場合」横山廣子編『国立民族学博物館調査報告 50：少数民族の文化と社会の動態——東アジアからの視点』、p181-204
- 云南**编辑组**
1991『白族社会歴史調査 (三)』, 云南人民出版社